

年頭のご挨拶

和歌山県知事 仁 坂 吉 伸



新年あけましておめでとうございます。
植物防疫協会会員の皆様におかれましては、
すがすがしい新春をお迎えのこととお慶び申し
上げます。

新しい年を迎えると、昨年より良い年である
ことを願いますが、今年は誰もがその思いを一
層強くしているのではないかと思います。

昨年一年を振り返ってみますと、日本列島が
度重なる災害に見舞われた大変な年でありまし
た。災害に対しては万全の対策をしてきたつも
りでしたが、改めて自然の猛威を目の当たりに
したことで、東南海・南海地震や台風・豪雨など
災害に対する更に強力な備えが必要であると痛
感しました。二度と今回のような被害が起こら
ないように、全力を尽くしていきたいと思いま
す。

一方で、和歌山県の底力をあらためて確信し
た年でもありました。

和歌山には、戦後の復興をはじめ、危機に直
面したときこそ、底力を発揮し、それを乗り越
えて新たな道を切り開いてきた歴史がありま

す。私は、かねてからその力を信じ、県政の様
々な課題に取り組んできました。今回の災害で、
ライフラインや交通網が大打撃を受けたにもか
かわらず、県民の皆様の団結と献身によって驚
異的なスピードで復旧を遂げました。これこそ
が、私が信じていた和歌山の底力です。

同時に、国内外からのあたたかい支援や協力
があってこそ、その力が発揮されたことも忘れ
てはなりません。多くの皆さんの励ましに感謝
し、その声に応えるためにも、敢然と前を向い
て進んでいかなければならないと、決意を新た
にしています。

今年は、本格的に復旧・復興に取り組んでい
きます。被災された方々の暮らしや地域経済を
再建し、さらに災害に強い県土づくりを目指し、
幹線道路ネットワークの整備など必要な対策を
進めていきます。これまでよりも、もっと良い
和歌山、より強い和歌山にするために、県民の
皆様と一緒に果敢に挑戦していきます。

また、消費者が安心して和歌山の農産物を選
択してもらえよう、生産者が自主的に取り組
む生産履歴の記録や収穫前の残留農薬検査によ
る農産物の安全管理の取組に加え、出荷段階で
も残留農薬検査を行う取組について、県が認証
する「わかやま農産物安心プラス認証制度」を
始め、安全・安心な農産物づくりの推進に引き
続き努めてまいりたいと考えておりますので、常
日頃より適正かつ効率的な病害虫・雑草防除を
推進されている貴協会のより一層のご協力のほ
どよろしくお願いいたします。

年頭にあたり、貴協会の益々の発展と会員皆
様のご多幸とご健康をお祈りし、ご挨拶といた
します。

平成24年元旦

目 次

年頭のご挨拶	1
平成23年度農薬防除技術確認圃成績検討会概評	2
イチゴ「まりひめ」栽培に適した追肥技術	4
スプレーギクの冬期栽培における日長延長時の光源と開花・切り花品質	5
カキ「平核無」の新たな樹形改造法による低樹高化	6
ウメすす班病の防除対策	8
協会だより	10

平成23年度農薬防除技術確認圃成績検討会
概評

農業試験場環境部 島津 康

平成23年度の農薬防除技術確認圃成績検討会が平成23年11月25日に開催された。

その概要は以下の通りである。

－水稲の病害虫－

ツインターボフェルテラ箱粒剤のコブノメイガに対する防除試験が2試験実施されたが、対象害虫が無発生または極少発生のため、防除効果の判定ができなかった。ビルダーフェルテラスタークル箱粒剤のいもち病、コブノメイガ、フタオビコヤガに対する防除効果は、病害虫の発生がなく判定できなかった。処理が容易なため普及性があると思われるとの普及上の意見であった。嵐プリンステス箱粒剤のいもち病、紋枯病に対する防除効果、モミガードCドライフロアブルのばか苗病、籾枯細菌病に対する防除効果、イモチエースキラップ粒剤のいもち病、ウンカ類に対する防除効果は、いずれも病害虫の発生がないか、極少発生であったため、判定できなかった。アプライプリンス粒剤のいもち病、イネミズゾウムシ、ウンカ類に対する防除効果は、対照薬剤とほぼ同等であった。ノンブラスフロアブルのいもち病、穂枯病に対する防除効果は、前者では対照薬剤とほぼ同等で、後者は発病がなかった。スタークルメイト液剤10のツマグロヨコバイ、カメムシ類、ウンカ類に対する防除効果は、いずれも対照薬剤とほ

ぼ同等であった。

いずれの薬剤も薬害は認められなかった。

－野菜の病害虫－

トマト：クリーンサポートの灰色かび病に対する防除効果について2試験が行われ、1例では発生がなく判定できなかった。もう1例では、散布前に発病のあった可能性があり、対照薬剤とともに効果は認められなかった。特別栽培でカウントされないため、状況によっては有利であるが、防除効果についてはさらに検討が必要であるとの普及上の意見であった。プレバソンフロアブル5のトマトハモグリバエに対する防除効果は極少発生のため判定できなかった。

ミニトマト：オンシツコナジラミに対するアニキ乳剤は対照薬剤と同等で、無処理に比べて防除効果が認められた。プレバソンフロアブル5のトマトハモグリバエに対する防除効果は無処理に比べて高かった。アフェットフロアブルの葉かび病に対する防除効果は対照薬剤にまさり、無処理に対して高かった。ランマンフロアブルの疫病に対する防除効果は対照薬剤と同等で、無処理に比べて高かった。ハモグリバエ類に対してプレオフロアブルは対照薬剤にまさり、無処理に比べて高い防除効果であった。

ナス：プレバソンフロアブル5はトマトハモグリバエに対して、対照薬剤にまさり、無処理に比べて高い防除効果が認められた。

スイカ：ダニサラバフロアブルのハダニ類に対する防除効果は、対照薬剤にまさり、無処理に比べ高かった。

ダイコン：ランマンフロアブルの白さび病に対する防除効果は、無発生のため判定できな

った。

ハクサイ：シグナム WDG は白斑病に対して対照薬剤にまさり、無処理に比べて防除効果が認められた。

キャベツ：キックオフ顆粒水和剤のコナガに対する防除効果は無処理に比べて高かった。

ブロッコリー：アオムシに対するプレバソンフロアブル5の防除試験は2試験が行われ、いずれも高い防除効果であった。

レタス：アブラムシに対してウララ DF は対照薬剤とほぼ同等で、無処理に比べて高い防除効果が認められた。

イチゴ：疫病に対するランマンフロアブルの防除効果は、発生がなく判定できなかった。

キク：ライトニングフロアブルはオオタバコガに対して対照薬剤にまさり、無処理に比べ防除効果が認められた。

いずれの薬剤も薬害は認められなかった。

果樹試験場うめ研究所 中 一晃

—果樹の病害虫—

1. かんきつ

ビスダイセン水和剤はかいよう病に対して、無処理と比べて一定の効果はあると考えられたが、黒点病に対する防除効果は判然としなかった。

スピノエースフロアブルはチャノキイロアザミウマに対して、対照のアドマイヤーフロアブルに比べやや劣る防除効果であった。

オーシャイン水和剤は灰色かび病に対して、対照のストロビードライフフロアブルとほぼ同等の防除効果が認められた。

2. うめ

ペンコゼブフロアブル、ナリア WDG はともに黒星病に対して対照のスコア顆粒水和剤と同等の防除効果が認められた。

ダニサラバフロアブルはハダニに対して、対

照のニッソラン水和剤と同等の防除効果が認められた。

3. もも

ダコレート水和剤は果実赤点病に対して2試験が実施され、対照薬剤とほぼ同等の結果とやや劣る結果であったが、両試験とも防除効果は認められた。

本年は多雨条件での試験であり、試験区、対照区ともに対象病害の発生が多く、普及する上で薬剤散布間隔等の検討が必要との意見があった。

ジマンダイセン水和剤の薬害確認試験では、昨年の試験で葉に生じた黄色斑は認められず、本剤との因果関係はわからなかった。

しかし、混用した殺虫剤等の他剤による影響と思われる症状が認められた。これは葉の一部に赤褐色斑点が生じて抜け落ちるものであったが、原因ははっきりしなかった。

4. すもも

インダーフロアブルは灰星病に対して対照の薬剤とほぼ同等の防除効果が認められた。

イチゴ「まりひめ」栽培に適した追肥技術

－追肥重点型で収量アップ！－

農林水産総合技術センター農業試験場 田中寿弥

1. はじめに

農業試験場では、イチゴの県オリジナル品種「まりひめ」の施肥体系確立に向け検討を行っている。その中で、基肥を控えることで、第2果房の開花、収穫開始が早くなることがわかった（農試ニュース第115号）。

ここでは、追肥量が生育、収量に及ぼす影響を明らかにした。

2. 材料および方法

試験区は追肥窒素量（10aあたり）が①6kg、②12kg、③24kgの3区とした。追肥はトミー液肥ブラック（10-4-6）を用い、11月29日～4月26日まで週に2回施用した。1回あたりの窒素施用量（10aあたり）は、それぞれ①0.125、②0.25、③0.5kgとした。

2010年7月15日にポット受けし、7月29日に切り離れた苗を、9月21日に定植した。栽植密度は畝幅1.4m、株間22.5cmの2条植え（供試株数30株/区、2反復）とした。基肥窒素量（10aあたり）は6kg（エコロング424-100、有機配合ペレットを各3kg）とした。試験ハウスでは、外張りビニルを10月26日、マルチを11月1日に被覆した。電照は12月24日～1月31日の間、17時～21時に行った（15時間日長）。ハウス加温は朝～夕を最低10～12℃、夜間を最低5℃設定で管理した。

3. 結果

厳寒期（2月18日）の株の生育状況は、追肥量24kg区が、6kg区、12kg区に比べて、草丈、葉柄長、小葉長、葉色（SPAD値）が大きい傾向にあった（表1）。

1～4月の時期別収量及び総収量は、24kg区、12kg区、6kg区の順に、追肥量が多いほど増加した（図1）。

表1 追肥量と厳寒期(2月18日)の株の生育状況

追肥量	草丈 (cm)	葉柄長 (cm)	小葉長 (cm)	小葉幅 (cm)	葉色 (SPAD)
6kg	18.6 ab	12.9	7.7 ab	6.3	52.0 c
12kg	18.1 b	12.9	7.4 b	6.1	53.6 b
24kg	19.7 a	14.0	8.0 a	6.2	55.6 a

注)葉柄長は新生第3葉、小葉長、小葉幅、葉色は新生第3葉の頂小葉を測定。異アルファベットは5%水準で有意差あり(tukey法)。

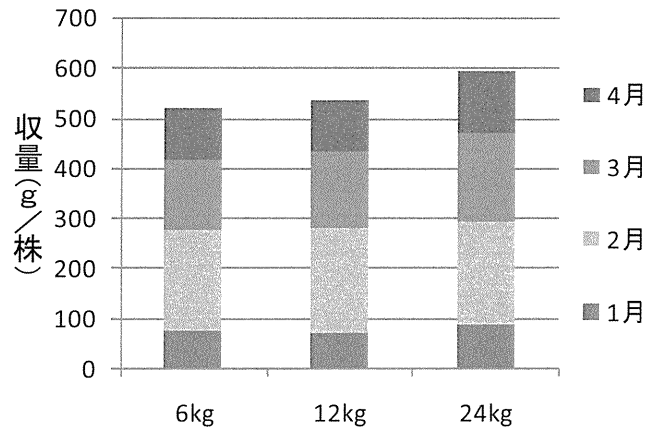


図1 追肥量と時期別収量

注)収量は7g以上果実の合計

4. おわりに

以上のように「まりひめ」は、追肥量が多いと厳寒期の株の生育が良好となり、収量が多かった。

このことから「まりひめ」の施肥体系は、①「基肥を控え（10aあたり窒素施用量5～10kg、「さちのか」の1/2～2/3程度）第2果房の分化を促進させ、第1果房と第2果房との収穫の谷間をなくす」、②「追肥を十分に行い、厳寒期の草勢を維持し成り疲れを軽減させ、収量を高める」、追肥重点型とすることが望ましいと考える。

ただし、一度に多量の追肥を行うと、チップバーン等の生理障害が発生するおそれがあるため注意が必要である。

スプレーギクの冬季栽培における日長延長時の光源と開花・切り花品質
 —電球型蛍光灯は白熱電球と同等の効果—

農林水産総合技術センター農業試験場 宮前治加

1. はじめに

スプレーギクは、切り花長を確保するために定植から約1ヶ月間深夜に電照を行い（暗期中断）、開花を抑制しながら栽培する。この光源として、白熱電球に比べて消費電力が少ない電球型蛍光灯が導入されつつある。スプレーギク栽培では、このほかに自然日長が短日となる冬季に茎伸長や上位葉の小型化を改善する目的で、暗期中断終了後も日長延長を行うための電照が使用される。

ここでは、冬季において日長延長に用いる光源を白熱電球と電球型蛍光灯で比較し、電球型蛍光灯の品質向上に対する効果を検討した。

2. 試験方法

「セイプリンス」の砂上げ苗を2010年12月9日にプランターに10株定植し無摘芯で栽培した。定植から1月11日まで深夜4時間の暗期中断を行った。1月12日からは、17:00～翌朝7:00までシェードし10時間日長とし、白熱電球（パナソニック製のり、75W）および電球型蛍光灯（同EFD25EL、22W）による日長延長処理を開始した。電照の照射時間帯は、早朝区（5:00～7:00）と夕方区（17:00～19:00）の2区とし、いずれも2時間ずつ照射を行い、12時間日長で開花まで実施した。また、電照を行わない無処理区も設けた。1区3プランターとした。

表1 10時間日長下における暗期中断後の日長延長に用いる光源の種類がスプレーギクの開花および切り花品質に及ぼす影響

電照の時間帯	光源	到花日数 ^a (日)	切り花長 ^b (cm)	切り花重 ^c (g)	茎径 ^d (mm)	花序数 ^e (個)	花首長 ^f (cm)	葉長 ^g (cm)	葉重 ^h (g)
早朝	白熱球	54.0	69.4	48.6	4.6	10.7	4.1	4.4	0.9
	電球型蛍光灯	53.8	67.4	48.4	4.5	10.6	4.1	4.6	1.1
夕方	白熱球	60.0	75.2	52.1	4.8	8.9	7.4	5.5	1.6
	電球型蛍光灯	59.5	75.8	51.5	4.9	9.0	6.4	5.5	1.7
	無処理	53.0	63.8	49.1	4.6	10.1	4.0	4.4	1.0

注) 12月9日の定植から1月11日まで深夜4時間の暗期中断を実施、1月12日から10時間日長とし、早朝区は5:00～7:00、夕方区は17:00～19:00の2時間各光源で照射
 最低気温15℃、日中は25℃設定で天窓換気した。

^a 暗期中断終了から開花までに要した日数
^b 切り花の中間位置の茎径
^c 舌状花に着色が認められた花序数
^d 上位5花序の花首長の平均値
^e 上位5葉の平均値
^f 上位5葉の重さ

3. 試験結果

到花日数は、両光源ともに無処理区に比べて早朝区で約1日、夕方区で約7日多かった(表1)。切り花長は、夕方区、早朝区、無処理区の順に長く、光源間では明かな差異は認められなかった(図1、表1)。切り花重、茎径、花首長、葉長、葉重は、両光源ともに早朝区では無処理区と明かな差異は認められなかったが、夕方区では両光源ともに無処理区よりも優れた。花序数は、両光源ともに、夕方電照区の方が無処理区より少なかった。

4. おわりに

供試した電球型蛍光灯は、暗期中断終了後に10時間日長下で日長延長に用いる光源として、白熱電球と同等の品質向上効果が得られた。光源の分光分布によって得られる効果が異なると考えられるため、今後は日長延長による品質向上効果が認められる光質を検討する。また、今回実施した照射方法では、夕方の電照でより品質が向上したものの、開花の遅れを伴った。このため、照射期間など開花の遅れが少ない照射方法についても検討したい。



図1 10時間日長下での夕方電照区における光源の種類とスプレーギク切り花

カキ「平核無」の新たな樹形改造法による低樹高化

農林水産総合技術センター果樹試験場

かき・もも研究所 堀田宗幹

はじめに

和歌山県はカキの生産量約 5.7 万 t、全国シェア 22.2%（平成 21 年）を誇る全国 1 位のカキ産地です。本県のカキ生産の特徴として、渋ガキの「刀根早生」、「平核無」でカキ生産量全体の約 80%を占め、また傾斜度 15 度以上の急傾斜園の割合が 6 割近くに達しています。しかし、カキは高木性の果樹であるため樹高が高くなりやすく、摘蕾、摘果や収穫前の摘葉、収穫、冬季のせん定など管理作業は必然的に脚立による高所作業が多くなるのが現状です。写真 1 は現場で主に採用されている開心自然形仕立て樹において、アルミ脚立の 6 段目（高さ約 1.8m）に立って摘蕾作業を行っているところですが、作業性が悪く安全性に問題があります。生産者の高齢化が進むなか、作業性、安全性の改善が求められます。低樹高化のためにはカットバックせん定等による樹形改造が行われますが、当研究所では視点を変えた樹形改造法を検討していますので紹介します。

樹形改造法の概要

改造後の樹形は、樹高が 2 m 程度の 2 本主枝一文字樹形を目標としました。冬季せん定時に樹高約 3.8m の 15 年生「平核無」を、地上高 50cm 位置で主幹を切断しました（写真 2）。改造 1 年目の秋季には切り株から長さ 3 m 程度の徒長枝が 10 本程度発生し、そのうち 4 本を残して切除して、翌春に残した 4 本のうち 2 本ずつを 2 方向に誘引し主枝候補枝（各々 1 本は予備）としました（写真 3、4）。改造 2 年目には、誘引した主枝候補枝から翌年の結果母枝となる新梢が多数発生し、冬季せん定時に各方向で主枝を 1 本に決定し 1 本を切除しました。改造 3 年目の春には目的とする 2 本主枝の低樹高仕立て樹がほぼ完成し、樹高 2.1m で 460 個以上の着蕾がみられ、秋

には脚立を使用せずに果実を収穫することができました（写真 5、第 1 表）。

枝幹害虫の防除

新たに発生する徒長枝を新主枝として活用する上で、もっとも重要となるのが徒長枝を加害するヒメコスカシバやフタモンマダラメイガ等の枝幹害虫の防除です。「刀根早生」を用いた調査では、枝幹害虫の加害を受けた新梢は生育が劣り、折れやすく主枝としては適さないことがわかりました。ヒメコスカシバ用の性フェロモントラップを設置して雄成虫の発生活消長を調査したところ、発生は 4 月下旬から 10 月下旬まで断続的であり、ヒメコスカシバおよびフタモンマダラメイガの枝への加害は 7 月以降増加しました。交信攪乱剤の設置および夏季のフルベンジアミドフロアブル 200 倍散布により、枝幹害虫の加害が軽減する傾向がみられました。

おわりに

この改造法の利点として、カットバックせん定とは異なり新たに主枝を作り直すので、自在に新主枝の高さや配置を決めることができます。また、作業が非常に単純ですので、整枝せん定作業の経験が少ない方でも取り組むことができます。

その他、主枝から発生する新梢を翌年の結果母枝として毎年一定量を更新することでせん定作業を簡素化する管理法や、着蕾数を制限し摘蕾摘果作業を軽労化する管理法も併せて検討しています。今後実用化に向け、新梢の発生条件や誘引方法、枝幹害虫防除法等の検討を重ねていきます。なお、この研究は農林水産省による「新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業」で行っています。



写真1 樹高の高い開心自然形仕立て樹での摘蕾作業



写真2 改造1年目の4月
地上高50cm位置で切断した主幹から不定芽が発芽

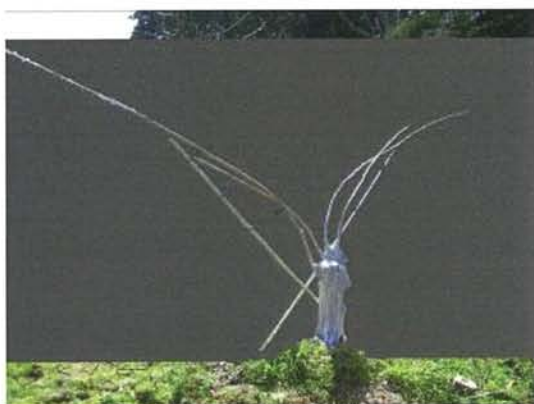
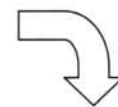


写真4 改造2年目の4月
徒長枝を2方向に誘引



写真3 改造1年目の12月
徒長枝が3m程度まで伸長



写真5 改造3年目の5月
発生した新梢に着蕾がみられる

第1表 改造3年目の「平核無」の樹体生育および着蕾状況

主枝長 (cm)	樹高 (cm)	結果母枝 数	結果母枝 長(cm)	着蕾総数	結果母枝あたり	
					新梢数	着蕾数
638	209	47	30.7±4.5	466	8.0±0.7	9.9±2.0

表中の±は標準誤差

ウメすす斑病の防除対策

農林水産総合技術センター果樹試験場
うめ研究所 武田知明

はじめに

ウメすす斑病は糸状菌を病原とし、果実と枝に発生する。果実の組織表面に菌糸や柄子殻が蔓延することにより、薄墨を流したような病斑を形成するため商品価値を低下させる(図1)。

伝染源は前年の夏から秋にかけて一年生枝に形成される枝病斑で、枝病斑上に形成された孢子(分生子)が雨水で流され果実に感染すると考えられる。果実への感染は四月末から五月上旬頃に始まり、五月下旬以降の感染で発病しやすい。発病には果実の生育ステージが影響すると考えられ、感染時期にかかわらず六月上中旬頃から発病する。このため、本病は収穫期が遅い「南高」の完熟収穫で重要防除病害となっている。

本病は多雨条件とともに、日照、通風不良園で発生が多い。また、発生時期は梅雨と重なるため、被害が大きくなる場合がある。2011年は5月下旬から6月中旬の降水量が平年の2.9倍と多雨に経過したため、本病が多発し、産地で大きな問題となった。

ここでは、登録薬剤のうち本病に効果が高いとされる3剤について多雨条件下での防除効果を検討した。また、パラフィン系展着剤の残効性向上効果についても検討した。

1. 多雨条件下における薬剤の防除効果

うめ研究所内の南高10年生樹を供試した。オーソサイド水和剤800倍、スコア顆粒水和剤3,000倍は2011年4月29日、5月13日、25日に散布した。デランフロアブル2,000倍はウメでの総使用回数が1回であるため、4月29日に1回散布した。6月10日、21日に1樹あたり100果(100果に満たない場合は全着果果実)について、

程度別に発病を調査し、発病果率および発病度を算出した。1区1樹3反復で行った。

試験期間中は5月25日から6月20日にかけて、降水量520.5mm、降雨日数19日と多雨に経過した(表1)。無散布区の初発は6月10日で、6月21日の発病果率87.0、発病度47.1と甚発生条件下での試験となった(表2)。防除価はオーソサイド水和剤で95.3、デランフロアブルで88.7、スコア顆粒水和剤で86.6といずれの薬剤も高い防除効果が認められた。

以上の結果からこれら3剤は耐雨性に優れ、多雨条件下でも高い防除効果を示すと考えられた。

2. 展着剤の残効性向上効果

うめ研究所内の南高10年生樹を供試した。2011年3月29日にストロビードライフロアブル2,000倍、4月26日にスコア顆粒水和剤3,000倍を散布した区をスコア単用区とし、スコア顆粒水和剤にパラフィン系展着剤のアビオンE1,000倍を添加した区をスコア+アビオンE区とした。調査方法は1と同様である。1区1樹3反復とした。

防除価はスコア+アビオンE区で75.7、スコア単用区で35.0とアビオンEを混用することで防除効果が高くなった(表3)。

過去の試験において、少雨条件下ではアビオンE混用による薬剤の残効性向上効果は判然としなかったが、今回の試験において、多雨条件下では残効性向上効果があることが確認された。

おわりに

本病の薬剤による防除は、予防散布を基本とする。本病を的確に予防するためには、薬剤の残効が切れないよう効果的に薬剤散

布を行うことが大切である。
 そのためにも、今後は薬剤の耐雨性、残

効性などの特性について調査し、防除体系
 の確立に役立てたい。

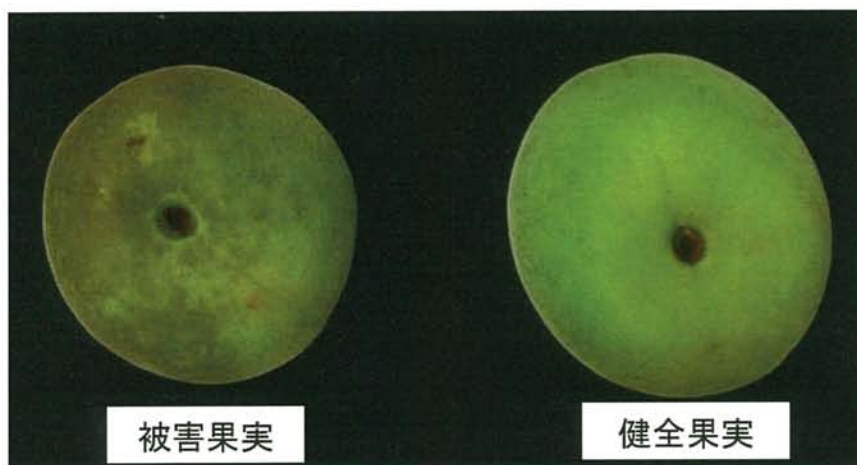


図2 すず斑病の果実病斑

表1. 試験期間中の降水量と降雨日数

	3/29-4/12	4/13-4/25	4/26-4/28	4/29-5/12	5/13-5/24	5/25-6/9	6/10-6/20
降水量(mm)	79.5	93	77.5	133.5	59	204	316.5
降雨日数	2	5	1	6	4	10	9

(注)観測場所:うめ研究所(みなべ町東本庄)

表2 すず斑病に対する各種薬剤の防除効果

供試薬剤	希釈倍数	6月10日調査		6月21日調査		防除価
		発病果率	発病度	発病果率	発病度	
オーソサイト水和剤80	800	0.0 a	0.0 a	8.3 a	2.2 a	95.3
デランフロアブル	2,000	0.0 a	0.0 a	15.3 a	5.3 a	88.7
スコア顆粒水和剤	3,000	0.0 a	0.0 a	18.7 a	6.3 a	86.6
無散布		25.3 b	7.2 b	87.0 b	47.1 b	
有意性		**	*	**	**	

防除価は発病度から算出した。

** : 危険率1%で有意差あり。* : 危険率5%で有意差あり。

同一文字間には有意差がないことを示す。(Tukeyの方法)

表3 展着剤の混用がすず斑病の発病に及ぼす影響

試験区	6月10日調査		6月21日調査		防除価
	発病果率	発病度	発病果率	発病度	
スコア+アピオンE区	0.0 a	0.0 a	39.7 a	11.4 a	75.7
スコア単用区	0.0 a	0.0 a	74.3 b	30.6 b	35.0
無散布	25.3 b	7.2 b	87.0 b	47.1 c	
有意性	*	*	**	*	

防除価は発病度から算出した。

** : 危険率1%で有意差あり。* : 危険率5%で有意差あり。

同一文字間には有意差がないことを示す。(Tukeyの方法)

(社) 和歌山県植物防疫協会からのお知らせ

◎ 一般法人化移行に向けた検討会議の取り組みについて

公益法人改革関連3法が平成20年1月25日に施行され、5年後までにこれらの法律に基づく新しい法人に移行することが必要となっています。

このため、当協会では一般法人化への検討を重ね、平成23年開催の第1回理事会・総会の議決で協会内に検討会議を設置して本格的に移行計画を進めているところがあります。これまで三度の開催を致しましたのでその概要を報告します。

○ 第1回・平成23年8月5日(金)

主な内容としては

- (1) 新法人移行に関する情勢
- (2) (社) 県協会の財務状況を踏まえた今後の方向について
- (3) 新法人認可申請に必要な計画(案)策定のコンサル委託に関すること等々を検討した。

○ 第2回・平成23年11月8日(火)

主な内容としては

- (1) 移行認可に関するスケジュール(案)に関すること
- (2) 新法人の定款(案)について
- (3) 公益目的支出計画(案)に関すること等々を検討した。

○ 第3回・平成24年1月25日(水)

- (1) 移行認可に関するスケジュール(案)の作成検討
- (2) 公益目的支出計画(案)の策定について等々を検討した。

◎ 評議員会の開催

日時：平成24年2月15日(水)午後1時30分～

場所：書道資料館2F会議室

協議事項：平成24年度農薬技術確認圃等設置について

編集後記：新年明けましておめでとうございます。会員並びに関係の皆様方には健やかに新年を迎えられたことと存じます。

今回ご報告させて頂きました一般法人化の取り組み状況につきましては、今後とも機会ある度にお知らせしたいと考えています。

また、本年7月には社団法人化30周年を迎えることとなります。

つきましては、昨年の理事会・総会で決定されました植物防疫功労者表彰並びに記念講演を平成24年度総会当日に開催いたしますので何かとご支援・ご協力頂きますよう宜しくお願い致します。

年頭にあたり、皆様方にとって、実り多い年となりますようご祈念申し上げます。 役職員一同

発行所 社団法人和歌山県植物防疫協会

〒640-8281 和歌山市湊通丁南1-3-1

ル・シャトー真砂2B

TEL・FAX 073-431-4190

メールアドレス hiranota@cyber.ocn.ne.jp

発行人 阪上 日吉

編集責任者 天石 康治

印刷所 株式会社 高木プリント

〒640-8113 和歌山市広瀬通り丁3-15

Tel 073-436-2046